

'76年度入学案内

京都精華短期大学

〈男女共学〉

| | |
|--------------------------|----|
| 本学志望のみなさんへ | 2 |
| 学科課程 | 4 |
| ■一般教育 | 5 |
| ■英語英文科 | 10 |
| ガイドコース | 11 |
| セクレタリー(秘書)コース | 11 |
| 貿易英語コース | 11 |
| 英米文学コース | 12 |
| 国際文化コース | 12 |
| 英語英文専攻科 | 13 |
| ■美術科 | 16 |
| 絵画コース | 16 |
| デザインコース (デザインクラス・マンガクラス) | 16 |
| 染織コース | 18 |
| 立体造形コース | 19 |
| 美術専攻科 | 19 |
| アッセンブリー・アワー | 24 |
| 座談会 | 30 |
| 寮生活と私 | 36 |
| 顔・顔・顔 | 38 |
| 教員組織と担当科目 | 56 |
| '76年度 英語英文科募集要項 | 60 |
| '76年度 美術科募集要項 | 62 |
| 学費及受験生への諸注意 | 64 |
| 卒業後の進路 | 66 |
| 資格取得(図書館司書課程・教職課程)諸制度 | 67 |
| 大学案内図 | 68 |



ぼくは、悩み多き少年であった。海と文学が好きであった。ぼくは、悩み多く青年時代もすごした。だから、何かを追い求めるように、日本の学校を終えると長年にわたり、外国をさまよい歩いた。悲しいかな、今はもう「悩んでいます」など口にもできない年齢になってしまった。しかし、「三つ子の魂、百まで」で、やはり依然として悩み多き人間である。

第一、このようなパンフレットに、偉そうにキレイごとの巻頭言を書く気になれない。よくある胸像のような謙厳な自信にあふれた学長タイプは、ぼくは嫌いだ。自己を疑うことを知らない人間になることは、怖ろしい。それより、いつまでも悩み多き一人の人間（自分自身）でいたいし、肩書は学長であるにせよ、自分で納得のゆく人間として、悩み・考え・行動したい。だから、普通の時は、古いジーパン姿で、授業に出たり学内をとびまわっている。

しかし、大学の責任者としての学長でもあると、大学についての疑問や悩みも、少なくない。どうして、日本にはやたらに大学が多いのか、私学の宿命でどうしても授業料を高額にしなければ経営できないのだが、どうして親たちはこんなに高い授業料を払ってまで子どもたちを大学に送りこむのか、なぜ社会は大学を出ていないと一人前に扱わないのか、大学とはなくてはならないものなのか、大学とは、学生とは、教育とは、いったい何なのか……などと。

一般の大学であったら、おそらく、「学長がそんなことを言っでは困ります。たとえ、多少の誇張はあってもいいから、大学の理想を得々と述べてください！」と、ぼくは文句をいわれるであろう。あるいは、少しズルがしこく親切ぶった者は、「誇大宣伝などと気にしないことです。学生がちゃんとしてくれていれば、理想に進めるわけです。ただ、近頃の学生はイイ加減なのが多いのでねエ。」などと、ぼくを慰めてくれるかも知れない。

しかし、われわれの大学では、そうでない。ぼく以上に、多くの教職員たちは、大学とは何か？……教育とは何か？……どうすれば、よりよくなるか？……と、真剣に考えている。そして、試行錯誤を怖れず、新しい大学づくりに努力している。

そして、われわれが悟ったことは、教育とは、いい授業をすればいいということだけではない、いいかえれば教壇から学生への一方通行だけではいけない、ということ。学生と教職員との相互的な共同作業の上でのみ、われわれの考える教育が成立する、ということであった。「教える」ということは、学生から「教えられる」こと。「学生の素質をのばす」ということは、学生が「自分の素質を自分でのばす」こと。「いい先生」とは、学生が心から「共感して慕う先生」のこと。「いい大学」とは、学生がのびのびと「自分を感じる大学」のこと。

Education（教育）のもともとの意味は、その人の裡にもっている素質や才能を、外面（Ex）に引き出してゆく

（duco）こと、Ex-duco なのである。決して、一つの鑄型に誰も彼もはめこむことではない。

こうした本当の教育が、本学にはあると思う。二、三の例をあげよう。昨年の夏休みに、ぼくは著書執筆のため、毎日大学の研究室で夜おそくまで仕事をしていた。夏休みにかわらず連日登校して制作をしている数人の学生もいたし、教員たちもいた。秋になって美術シーズンが開幕すると、彼ら彼女らは、堂々と専門芸術家に伍して、公募展や日展で、受賞したり入選していた。驚くような歓びで、「よかったね！」という、「先生も頑張っていましたね！」と、微笑する。まさに、もはや教師と学生との関係ではない。相互に励ましあったのだ。

75年2月、京都市美術館で催された本学美術科展も、好評だった。自分の作品の前にいた一女子学生をつかまえて、「よくやった」とほめると、「指導の先生からアカン・アカンといわれ、泣き泣きやりました」と、晴々と若い瞳をかがやかせた。青春時代、うちこむものを持ち、うちこめた成果を誇る幸福さにみちた瞳だった。

ある会で、京都商工会議所のおエラ方と同席したら、「オタクの卒業生は、いいです。のびのび明るく先を見る目がある」と、ほめられた。英語英文科の卒業生たちのことである。「先を見る目がある」には、個人差もあって、自信ありません。しかし、「のびのび明るい」ことには、確信がもてます」と、ぼくは答えた。なぜなら、在学生が、のびのび明るいからである。

もっとも、これは教育の成果だけでもない。大学の立地条件にもよるのだ。古都も洛北の山すそ。春にはウグイスが鳴き、一面の新緑がまぶしい。グリーンのセーターは、動物なら保護色になってしまう。秋は比叡山と紅葉が美しい。ホテルも田の上をとぶ。その只中に、本学はあるのだ。だからこそ、行政区域的には都会だが、都会のイライラやストレスなしに、のびのび明るく勉強も人間形成もできるのである。

しかし、教育とは、きつくきびしいもの！そして、繰り返して述べれば、教育とは、学生と教職員の息のあった協同作業なのだ。ちがいますか？みなさん、夢のある大学を、あなた方と創ってゆきましょう。

伊谷記念朽木学舎

伊谷記念朽木学舎は6月にオープンした。滋賀県高島郡朽木村古屋。福井県と京都府の境界に近く春になっても雪は深い。人口350人。ほとんどが留守居の老人と子どもである。

過疎の問題があった。「教員××のバカ」「一生うらむぞ」「かえってこい」——くつかの落書があった。村の人々の好意で安く譲り受けることができた。

このセミナーハウス構想は、美術科創設の中心になった故伊谷賢蔵教授の画集の収益を有意義に活用することを契機として始まった。民話の宝庫といわれ、轡轡師の故里であるこの朽木村で、どんなセミナーハウスをつくりあげ、村の人々とどんなにかわりをもつか——すべての教職員・学生の課題である。



文藝春秋